

(3) 討論「防災教育に求められるコミュニケーション」

パネリスト	左海 伸和	(当時の田辺第一小学校 児童保護者)
	佐々木三千代	(当時の田辺第一小学校 担任教諭)
	玉置 浩	(現在の田辺第一小学校 教諭)
	京田 光広	(シンサイミライ学校 ディレクター)
	片田 敏孝	(群馬大学 授業実施者)
コーディネーター	金井 昌信	(群馬大学)

以下略



金井 このパネルディスカッションでは、田辺第一小学校の“シンサイミライ学校の授業”、そして“それを契機に現在実践されていること”を題材に、「子どもたちと、どのように防災について語りあい、考えていけばよいのか」というように、『防災教育を教師と子どもたちとの間の“コミュニケーション”という観点で捉えたときに、何が重要になってくるのか』について、皆さんと一緒に議論させていただきたいと思います。まずはパネリストの皆さんに一言ずつ自己紹介がてらコメントをいただければと思います。

左海 3年前に佐々木先生から取材の依頼の電話をいただきました。当時、片田先生が授業に来られることを、僕ら保護者は知りませんでした。私もあまり難しく考えずに、「できることであつたらやりますよ」という感じで取材をお受けしましたが、まさか3年後にこうしてこの場に居るとは思いもしませんでした。ビデオにもありましたように、家の居間までNHKさんのカメラが入りました。子どもたちは昼間に授業を受けましたが、一枚のプリントはいただきましたが、私たちは授業を受けておりませんでしたので、ほとんど授業内容を知りませんでした。

NHKさんからもあまり説明もなく、娘が帰ってきて、いざ話を始めるのですが、よくわからないまま、どうしたものかと家族会議をしたのがビデオの風景でした。本当に今となっては片田先生と出会い、防災教育をしていただいたことで、人生で大切なものを得たように思います。

玉置 学校では、防災に限らず、大きな事象があるとしばらくはその対策と取り組みが進みます。しかし、少し時間が経過すると忘れてくるという問題が大きいと思っています。このような機会を通じて、“何も起こっていない今、できることをどれだけするか”が、一番大事な点じゃないかと思っています。普段から学校教育の中で、子どもたちに、「災害が起きておらず、何も心配することがないときに、どれだけ緊張感のある授業をすることできるか」など、工夫して

いかなければいけないと思います。今回の連絡協議会や担当者会は、そのことに気づいただけでも意義が大きいかなと担当者としては思っています。

京田

シンサイミライ学校を始めた当時は、NHK の大阪放送局におりました。今は NHK の神戸放送局で働いています。シンサイミライ学校からスタートし、東日本被災地に通いながら、幅広く震災について番組をつくっております。先生のお話にあったように、大阪・神戸でいえば、阪神淡路大震災以降、防災や減災という言葉も生まれて、『NHK スペシャル』等、いろいろな番組で『命を守るために』という番組を20年前から作り続けてきたと思います。今度、東日本大震災から5年を迎えます。被災後の区切りには、震災5年、震災10年のように、5年刻みみたいなものがあります。阪神淡路大震災は、震災10年が一区切りで、そこから少し空気が変わる中、神戸でもどんどん意識は下がりました。震災15年も、かなり大規模な番組をやりました。正直言いますと、東日本大震災発生時は、メディアに携わる人間としては、「震災は15年で打ち止め、やりきった」みたいなそういう気分でいました。

阪神淡路大震災から16年目の3月11日に発生した東日本大震災の衝撃は、“本当に自分たちはちゃんとやれてきたのかどうか”を、自分たちがもう一度問い直すきっかけになりました。そういう中で、何をやればいいのかと思ったときに『シンサイミライ学校』という発想が生まれました。この『学校』というのは、狭い意味での教室での学校教育というよりは、子どもだったり、家庭だったり、地域の人たち、行政、神戸でいえばNPO だとか様々な団体がありますが、それらの人たちが垣根を越えてみんなで学びあうような場所ができないか、という発想で『シンサイミライ学校』を番組やホームページ含めて展開しました。

そういう中で、片田先生に出会うことができました。片田先生の講演は、最初に大阪で聞かせていただいたと思います。「いくら防災の講演会をやっても防災好きしか集まらない」「全然広まらない。だから学校なんだ」という発想は、目から鱗でした。『NHK スペシャル』は大きな素晴らしい番組ですけど、好きな人しか見ないというところもあります。そういう中で、まったく新しいかたちで防災をやろうということで『シンサイミライ学校』がスタートしました。田辺第一小学校、高雄中学校の方々には最初、とにかく授業から始めました。カリキュラムなど含めて時間を確保することが大変でしたが、なんとか1年間やらせてもらいました。その結果、3年経って、今、こういう広がりがあるということを本当に嬉しく思っています。



左海 伸和さん



玉置 浩先生



京田 光広さん

片田 あれから 3 年経ちました。その後、佐々木先生に子どもたちの様子や家庭の様子を聞いたり、また左海さんのお話を伺ったりして、良かったなという思いをもっております。ただ、正直、シンサイミライ学校の番組を撮ったときの授業も、細かな授業計画を立てていたわけではありません。NHK から事前の打ち合わせで、『約束の命』というアニメをつくりました。いつも片田先生の話している内容に沿ったものです」ということくらいしか聞いていませんでした。しかし、そのような中で授業をしたことが良かったのかもしれませんが。そのときの状況の中で、素直に思ったことを子どもたちに伝えました。予定調和で「こういう内容をこう教える」という淡々としたものではなくて、「僕はこう思うんだ」ということを子どもたちにぶつけていく中で、子どもたちの心が動いたのではないかと思います。先生方があの授業をどのように見ていただいたかはわかりませんが、僕自身は教育の専門家ではありません。正直、元気な子どもたちが目の前にいっぱいいる状況は、面食らいます。日頃は、講義をする相手は大学生ですから、うるさかったら「黙れ」と言って黙らせて、淡々と授業をやります。それから講演会で大人を対象に話します。「危機感のない人は寝てればいい」くらいの感じでやっているわけです。あのように、子どもたちに向かい合って授業をやるというのは、「僕の思いをちゃんと伝えたい」「伝えなきゃいけない」「子どもたちが聞いてくれなかったらこっちのせい」という思いもあります。ですから、焦りながら自分の心をどうコントロールしていいのか、また、子どもたちにどうしたら伝わるのかということを探索しながら、数少ない経験をもとに、子どもたちに向かい合うわけです。シンサイミライ学校の授業そのものは、東日本大震災で釜石の子どもたちが一生懸命逃げてくれたというあの行動から、「何が子どもたちを動かしたのか」を考えながら授業をやりました。一つの結論としては、淡々と防災に関わる知識を付与していく教育ではない。とにかく子どもたちを突き動かすような、子どもたちの心を揺さぶることが必要なんだと思います。それが、「誰かに言われたから」とか「知識として逃げなきゃいけないんだ」という思いをつくるのではなく、「逃げたい」もしくは「逃げなきゃ」「僕は逃げるんだ」という、子どもの心の内から起きあがってきた内発的な気持ちをつくってやることにつながるのではないかと思います。そして、そういうコミュニケーションをするにはどうしたらいいのかという思いと、子どもたちと向い合わなきゃいけないという思いでやった授業です。ぶっつけ本番ですし、子どもたちの反応もどうでてるかわからないまま、やっているものですから、出来上がってみたら、こうだったということなのです。

また、一つ確信が持てたのは、“教える側の心づもり一つだな”ということです。子どもたちとのコミュニケーションなので、こちらがそれなりの思いをもって向かい合えば子どもたちの気持ちを変えることはできる、という実感もこの授業で持ちました。授業をやる側の心持ちをそこまでもっていく、もって行って子どもたちと向かい合うことは大変ですが、改めてビデオを見てみると、あの授業は僕の中ではけっこう良い授業ができたなと、思います。ただ、教育の専門家ではないので、ちょっと乱暴だったのかもしれませんが、その辺については先生方からも忌憚のないご批判もいただければなと思います。

金井 すでに確信に迫るところを、片田先生がキーワードとしてだしていただきましたが、「あの授業の何がいったい良かったのか」という点は追々考えることにします。

佐々木先生にご紹介いただいたように、シンサイミライ学校の前にも、子どもたちは防災の授業を受けていました。しかし、子どもたちが、親に「今日、防災の授業でこういうことを習

ってきたんだよね」と言うことはそんなにないような気がします。その一方で、片田先生のシンサイミライ学校の授業を受けたあと、宿題というかたちで「習ったことをお父さんお母さんと相談してこい」と言ったからというものもあるかもしれませんが、子どもたちはみんな親に言ったわけです。子どもたちに「親にも伝えたい」と思わせたのは何だったのか、というのがこのパネルディスカッションで重要な点になるのではないかなと思って話を聞いていました。

その中身に入る前に、左海さんにもう少し詳しくお話しを伺いたいと思います。あの日、NHKからの事前情報もほとんどなく、いきなりカメラが押しかけてきて、娘さんが切実に話をされたということでしたが、あの日以前に、左海さんのお宅では、一体どんな話をされていましたか。また、娘さんから話を聞いたときに、保護者としてのどのように思いましたか。

左海 正直に申し上げまして、あれ以前は親子で「どうやって逃げる」とか「地震が来たらどうしよう」とか、そういったことをほとんど話したことはなかったです。片田先生の授業を子どもが受けてきて、ビデオのような家庭での様子がありましたが、親としたら、「子どもを思って逃げる」という意思がまったくありませんでした。当時、娘は小学4年生で、一つ上に小学5年生の息子、そしてもう一人小学1年生の娘がおりました。それぞれまだ小さいですし、まず子どもの安否が気になるころでした。そのため、娘が帰ってきて、そういう授業を受けてきたという話を聞いて、最初は「え!？」という感じでした。それぞれが好き勝手に、じゃないですが、“それぞれの判断で逃げる”という話を聞いていくうちに、「そういうことか」「それが一番みんなが助かる方法なんだな」と思いました。命さえ助かれば、狭い町なので、あとで会うことはそんなに難しいことでもないでしょう。私の妻も同じ気持ちでしたので、あの授業をきっかけに親としてもそういう意識の変化がありました。

金井 二つ目のパネルディスカッションの内容になってしまうかもしれないのですが、学校で防災の授業をやる際に、地域と連携したり、保護者の方に協力してもらって一緒にやっというところを考える学校も多くなっていると思います。いろいろなやり方があると思いますが、このような方法も一つの連携のあり方になるのではないかなと思います。いくら片田先生がいろんな町に出張っていても、そこに出てくる人は意識の高い人です。そういう人たちではない、意識の低い人に情報を伝えることが難しいことは、ずっと前から言われていました。シンサイミライ学校の授業を受けてきた子どもが必死に保護者と話をする、それを聞いて保護者が変わったというのが、今のお話からもよくわかりました。

先にやり方の話は終わらせてしましましょう。京田さんにお聞きします。片田先生がシンサイミライ学校の授業をする際に、保護者の方に片田先生の名前で「このような授業するので、ご協力お願いします」という依頼文書を配布されていたと思います。このように、子どもの授業だけではなくて、そこに保護者や家庭を巻き込んでいったねらいや着眼に至った経緯、そして、その効果として期待したことなどがあれば、教えていただきたい。

京田 シンサイミライ学校の枠組みを説明したときにもお話ししましたが、『“学校”というかたちで子どもたちをきっかけに、いかに家庭や地域に広めていくのか』をシンサイミライ学校設立の理念として最初に決めていました。そういうイメージの中で片田先生と出会いました。片田先生から、釜石では、子どもたちへの宿題と保護者に協力依頼の手紙をだす取組を實踐して、非常に効果があったという話を聞きました。本当に効果はあるのか、実際に見てみたいという思いで企画しました。先ほど厳しいご指摘がありましたが、連絡が滞っていたのではなく、左

海さんに十分な説明をしなかったのは、そこで具体的にどんなことが起きるのか、片田先生が子どもの心を動かしたように、子どもが親の心を動かせるのかどうかをドキュメントとして捉えたいと思っていました。良い番組、面白い番組をつくりたかったわけではなく、この素晴らしい“片田防災”をちゃんと見つめて、そのことを過去の話ではなく、テレビというメディアを通して表現したいと思っていました。かなりのプレッシャーがあったかと思いますが、左海さんには頑張ってくださいました。一方で、カメラがなかったら、あそこまで頑張れたか、という思いもあります。左海さんの素晴らしいノリといいますか、ある種のホームドラマじゃないですか、その中で演じるというのは大事です。手紙を読んで理解して、親としてある意味で演じていると思うのですが、それがテレビカメラの存在でリアルになって、あの涙までいったのかなと思います。我々もあそこまでのことまったく考えておりませんでした。

片田 「NHK の準備が悪い」という批判をしているわけではないんですね。僕の授業でもそうですし、シンサイミライ学校の番組そのものもそうですけれど、予定調和というか事前に決めたことに沿ってやることなんてできないんです。今変えようとしているのは、子どもたちの心であったり、親子の信頼関係のもとでとられる行動であったりするわけです。事前にシナリオを描いてその通りにやっていると、知識としての理解にとどまってしまう。そうではなくて、その場、そのときに起こってくる子どもたちの素直な感情を見つけ、その動きをしっかり読みとり、そしてちゃんとコミュニケーションしていくという中に本当の心の動きというのがでてくると思います。そういう意味では、「準備が悪い」と言いましたけれど、批判しているわけではなく、だからこそ、ああいう非常にリアリティのある、現実感のあるものになったのではないかなと思います。

金井 番組をつくるうえでの注意点を議論するところではないのですが、まずは触れて置かないといけないなと思ったのは、釜石で防災教育を始めた背景です。片田先生が釜石で最初に防災教育を始めたとき、それまでずっと大人を相手にコミュニケーションをとってきましたが、どうしてもうまくいかないし、全然広がりませんでした。その中で、言葉が非常に悪いのですが、“子どもをだし”にして、子どもを介して地域に防災を広めていくことを目指して、防災教育を始めました。その経緯に京田さんはじめ皆さんが共感し、番組をつくっていただいたのだと思うのですが、田辺の事例を見ていると、僕は逆なのかなとも思いました。子どもの学校での授業の成果を最大限発揮するためには、家庭の協力は必要不可欠なんだと描かれているように感じました。もともと、左海さんのお宅は「番組前にほとんど何もなかった」とのことでしたが、「そういうご家庭でも、子どもの熱の入った言葉というのは響くんだよ」ということをご紹介したいなと思っていろいろお話を伺ったところです。

ここで片田先生にお話していただこうかと思います。議論の中でも、知識の教示、「逃げろ、逃げろ」と言うだけの教育、それから「津波っていうのはこういうもので逃げ方こういうんだよ」といった“知識の教育”ではなくて、「ちゃんと逃げたいんだ」「逃げなきゃいけないんだ」という内発的な気持ちをどうつくるのが重要で、それを狙った授業がシンサイミライ学校だったとのことでした。また、その中で、先ほどキーワードとして“心を揺さぶる”という発言もありました。シンサイミライ学校以外でも、いろいろな地域の事例を見ていて、片田先生ご自身は、「子どもの気持ちを焚きつける」というか「やる気にさせる」というか、子どもたちに主体性をもたせるために、何が重要だとお考えなのか、お話をいただきたいのです。

片田 防災教育のプロみたいに言われていますけれど、全然そうではなくて、本当に毎回毎回子どもたちに向かい合って動揺しています。「どういうふうに語ればいいのか」「どうすれば子どもたちの心を動かせるのか」「どうすれば子どもたちの心に僕は逃げるんだという気持ちをつくれるのか」ということに対して、毎回毎回手作りですし、毎回毎回個人と個人のコミュニケーションですから、「このようにやればよろしい」なんてうまくいくわけないんですね。毎回毎回悩みながら、正直恐れながらやっています。ただ、僕自身そんな中で防災教育とはなんぞやとずっと僕なりに悩みながら続けてきたわけですけど、おそらく先生方もそうだったと思います。僕も最初はそうでした。

防災教育というと、一定のかたちがあります。津波の危ないところであるならば当然津波のメカニズムは教えます。なぜ怖いのか、津波を知る。これも重要なことですので、それを否定しているわけではない。「過去にこんな被害がこの地域でありました」「だから逃げることは大事だよ」と、このように逃げることの必然性を理路整然と子どもたちに語っていく。これがこれまでの防災教育だったんだろうと思うし、それ以上のものも頭に浮かばなかったんです、正直。だからそれを僕も最初はやっていたんです。子どもたちの防災教育をやらなきゃいけない。そのご当地の津波の歴史を調べ、被害の歴史を調べ、その地域の地形の地図を持ってきて、「この学校だったらこの辺かな」というところをパワーポイントに準備して子どもたちに授業をやる。僕がやらなくてもいいよなっていう思いもありました。僕がやらなくてもいいし、誰がやってもそれだったら一緒だなと。そして何よりも「それをやったら子どもたちは本当に逃げるようになるのだろうか」って、率直な思いとしてそれがいちばん僕の中で疑問でした。

じゃあ、防災教育を本当に子どもたちが一生懸命逃げる子になるというかたちに仕上げているために、僕らは何を子どもたちに教えればいいのか？ わかったことは、そもそもこういう **How To** を教えようと考えた時点で、ダメだなということです。やりながら気づいたことです。どれだけこちらが熱心にやっても「わかりましたか？」と言えば、子どもたちは「はい」と言う。そして、津波が危ないところだって子どもたちもわかっているから、本当に従順に素直に「なるほど」ってわかってくれる。知識としての習得はある程度のところまではいけると思います。僕よりも先生の方がそれはうまいんだと思います。でもその領域でとどめたときに、本当に子どもたちは、その日そのとき、今まで経験したことのないような揺れの中で「逃げなきゃいけない」という知識があるだけで、本当に逃げられるでしょうか。「大事にしているうちのペットの犬は大丈夫だろうか」、「お母さんはいまどこにいるのだろうか」、「妹はどこにいるのだろうか」など、「逃げなきゃいけない」という知識以上に、その日そのときの状況によって、子どもにとって気になることが頭にポンッと思い浮かんでくることあるはず。それぞれ大事にしている人のことが頭に浮かびます。加えて、自分の命の危険に対しては、正常化の偏見という心理特性があつて、子どもであれ、大人であれ、自分の命がこれから無くなるうとしている、襲われて危ない目に遭うかもしれない、というリアリティを人間誰も持てないものです。自分の命が本当に危ういというのは、ナイフをちらつかされるとか、そういう状況でしか人間は本当に自分の命の危険をリアルに感じられないものです。その一方で、そのときに、頭に浮かぶのは自分の命の心配以上に、自分の大事にしているもの、お母さんだったり犬だったりということがまず頭に浮かぶ。そうすると、逃げなきゃいけないという知識がどこかに行ってしまうんです。逃げないといけないことは百も承知です。でも、その知識以上に、

「お母さんは僕を迎えにきてくれるだろうな」とか「妹はどこに行っちゃったんだろうか」とか、そんな中でそのときそのときの行動が規定されてしまう。結局、その行動の結果として“逃げない”という状況になる。

そうすると、理路整然と「逃げなきゃいけない」と教えたあの教育はどこに行ってしまったのか。その教育の成果はどこにいったらいいんだ。最初に出てくるのは「逃げなきゃいけない」という知識ではない。もっと大事なものは、その日そのときの頭に浮かびくるものです。それを前提にしたとき、それであつてもちゃんと命を守れる状況を整えるために、子どもたちに考えさせておかなければいけない。事前に子どもたちの頭に一度考えさせておかなければいけないこと、それは何なのかを考えなければいけない。先ほどの授業でもそうでしたけれど、「みんな逃げるよね？」と言えば、「はい」と言うわけですよ。そこで、改めて僕は「本当に逃げられる？」と問いかけます。「本当に逃げられる？」と問い直したあたりから、子どもたちの知識ではなく、その日そのとき起こることのリアリティがでてきます。「その日そのとき、君の頭をよぎることは何？」「君にとって大事なことは、学校で教えてもらった『高いところへ逃げないといけないよ』という知識を実行することなの？」その日そのとき迎えに来るであろうお母さんやお父さんのこと、その結果として起こること、それを子どもたちの頭の中に一度作り上げていくんです。そうすると、いっぺんに子どもたちの中にリアリティが出てきて、子どもたちは正直あの場面は動揺しているんですね。正直、僕も動揺しています。こんないわば答えのない、「お父さん、お母さんのことも放っておいて逃げちゃえ」って、これから子どもに教えようとしているわけですね。でも、そのときに子どもたちの頭によぎった親のこと、それからてんでんこするために、子どもたちの心にひっかかっている絆のこと、そんなこともどう子どもたちの心の中で処理させてやるのか。そこで信頼という言葉、信じあうこと。それぞれ信じあつて逃げる、その状況を整える、頭にももちろんお父さん、お母さんのことは思い浮かぶんだけど、僕が逃げていければお父さんも逃げてくれるんだ、というところに持ち込みたいがために、子どもたちの心を思いっきり揺さぶっているわけです。

その日そのとき懸命に逃げる子をとにかく作り上げないと子どもの命を守れないわけです。そのときの子どもたちの心の動きを、自分の中で現実感をもって再現し、それを手当てしていくという教育が必要になるわけです。先ほどのように「本当に逃げられる？」というところから紐解いて、子どもたちに自分が逃げることの意味、「そのときにお父さん、お母さんがそれを信じていてくれれば、お父さんやお母さんも逃げられるよね」というところまで持ち込んでいく。『自分の命を守る』ということの『家族の絆』と『自分の命』の意味を考えさせる。そして、自分だけじゃなく、お父さんもそう思ってもらわないとダメなわけです。そこで、左海家のような子どもたちのチャレンジがあるわけです。子どもたちにとっても大きな心の負担だろうと思います。何にも考えていない左海さんのお父さんがいて、友稀ちゃんは「逃げよう」と今日の授業で思った。でも、友稀ちゃんがいちばん心配しているのは自分の命ではない。迎えに来ちゃうお父さん、お母さんのことなんです。友稀ちゃんなりに勇気を振り絞って話を切り出したものの、その重さに耐えかねたわけです。だけど、そこまでもっていったからこそ、お父さんはそれを感じ取ったわけです。そして、お父さんも子どもに「逃げる」と宣言してくれたことで、友稀ちゃんが安心して逃げられる裁量をつくったということにもなる。

こういう設計しているわけです。防災教育をはじめ、冒頭申し上げた津波のメカニズムを教え、理路整然と逃げなきゃいけないという知識を与え、「逃げますか?」「はい」という良いお返事をもらう。それにとどまっていた防災教育から一步脱する防災教育へのそこに大きな転換があるわけです。いま、子どもたちに付与しているのは知識じゃない。もちろん知識も必要です。それは、内発的な意識をもった子どもがつかって初めて有効になる知識なんです。その内発的な気持ちをつくるということにおいて、そのコミュニケーションの設計をしているように思うんです。子どもたちとのこのコミュニケーションの設計。子どもたちにこういう問いかけをしたときに、子どもたちの心はどう動くのかを僕が予想し、そして、そのもとで次に投げかける問いを考える。その結果として、子どもたちの心を「僕は逃げるんだ」というふうに動かしていく。そして、その障害になる『お父さんやお母さんが迎えに来てしまう』という問題も解決して、これで晴れて友稀ちゃんは「私、逃げるもん」って思っていると思います。お父さんもたぶん信じておられると思います。こういう状態をつくりあげて、初めてその日そのときの最大の懸案が解決できる。そして行動にうつせるようになる。こういう設計をしているんだろうと思います。そういう思い至るまでにはずいぶん時間がかかりました。

僕が思うに大事なことは、自分の教えなきゃいけないと思っていることを箇条書きにして淡々と伝えようと思うことではなく、子どもの心の側に立って見たときに、いまこの子にとってこの刺激、この情報はどう心を動かし、その結果この子は何を心配し、もしくはいまどう思っているのかということをつぶさに読み解いて、そのうえで次の情報を与え、順番に子どもたちの心を導いていくというこういうコミュニケーションの設計なんだということです。これに気づきました。まだシンサイミライ学校を撮影していただいた当初は、確たるものまでもっていませんでした。ただ“何となくそうなんだ”ということを経験し、その後各地の学校に呼ばれて教育をやっていく中で、徐々に積み重ねていってこんなことかなと思い始めた矢先の撮影がこれでした。いま、正直確信に変わっています。これでいいんだと思っています。ただ、毎回毎回手作りで、どういうふうに子どもたちの心を動かしていいのかっていうことに対しては毎回毎回手探りです。例えば、牟岐町にお邪魔したときにも、この話題で子どもたちに授業をやったことがありました。子どもたちは「逃げる」と言ったわけなんですけれど、改めてシンサイミライ学校みたいなアプローチもしたんですが、その前にもう一つ挟んだのは、すごくリアルな状況想定をさせました。子どもたちは、学校で避難訓練を繰り返していたため、学校から逃げるイメージしかもっていませんでした。しかし、子どもたちは学校によるよりも家にいる時間の方が長く、しかもその大半はお布団の中にいる状況です。ときにはお風呂に入っていることもある。そのような状況で地震が発生したらどうするか?服を着て逃げる?裸で逃げる?冬場で寝ているときに地震が発生したら、パジャマのまま飛び出したら寒いかもしれない。どんどんリアリティを子どもたちに与えながら、そのときどうするのかを考えさせる問いかけを続けたというように思います。ちょうどそれが固まりつつあったときに、シンサイミライ学校の撮影がありました。あれから何年か経って、現在の田辺第一小学校の子どもたちの様子や、左海さんのお話を伺いながら、またその後の僕自身の取り組みもかえりみながら、そういうことなんだなという実感を持ち始めています。

だから「こうすればいいんだ」という“カタチ”を申し上げられないのが非常につらいんですね。「いまのケースはこういうケースだ」「子どもたちの心を動かすこういうケースだった」

と言っているだけで、他の状況想定、他の場面では、どうコミュニケーションしたらいいのかは毎回違うように思います。ただ大事なことは常に子どもの心がどう動くのかを常に見続けているってことです。それに寄り添いながら常にコミュニケーションしていくことだということとは間違いないかなと思います。

金井 「“カタチ”はない」と片田先生はおっしゃっていましたが、片田先生が授業されているのを見ていて、いくつか“カタチ”にできるキーワードというか知見はでてきたのではないかなと思うところがあります。

やはり知識として得たものではなく、いかにして自分の生活、自分の行動に鑑みて、“わがこと感”を持てるか、“リアリティ”を持てるかが、いちばん最初のとっかかりの部分で必要なのだと思います。しかし、津波という命を危険にさらす脅威に対してでも、残念ながら人はその脅威を自分のこととしてなかなか受け取れない。ここに踏み込んだときに、その子どもたちにとって重要な第三者、他者を介在させている。そこで他者への思いを喚起する問いかけをいれている。今回であれば「自分のお父さん、お母さんが逃げられないかもしれない」と。そういう背景の中で、自分だけではなく、自分の行動と自分の大切な人の結びつきの発問があったのかなと思います。

そしてもう一つは、そのときその状況になったときの対応を、リアリティを持って考えさせる中で、どちらがいいかの正解がない問いに対する葛藤をうまくつくっている点です。ただ、葛藤させておわりではなく、一つ正解があるような気がするんです。片田先生のいまの言い方をちょっと変えるならば、「その場そのときその状況に直面したら、もうどうすることもできない」「けれど、時間を巻き戻して、何も起きていない今の状況ではどうだろうか」「今ならやれることがあるよね」という正解があるような気がします。そして、いちばん重要だなと思ったのは、「振り返ってみて、いまやれることがあるよね」「さあやってみよう」と言って、必ず実践につなげている。今回のシンサイミライ学校であれば、おうちの人のことが心配なのであれば、宿題というかたちで、おうちの人にちゃんと伝えてみることを促す、という実践をさせている。さらに重要なのが、その実践した相手から自分のやった行為が認められて、「それでいいんだよ」「やってくれてありがとね」という評価が自分のとった行動をさらに勇気づけている。こういうかたちが、一時間の授業だけじゃなくて、一つの実践として、子どもの行動まで含めてコミュニケーションの設計をする。一つの授業案じゃなくて、そこまで踏まえた防災学習がいま重要なんじゃないかなと片田先生の実践のお話を聞いて思ったところです。

ぜひ、田辺第一小学校の佐々木先生と玉置先生にお聞きしたいのですが、佐々木先生、先ほどの話題提供の中で、子どもだけではなく、教職員も「自分の命は自分で守る」「家族の絆」「ふるさと田辺を愛する心」が大事であると、片田先生から教えていただきましたとおっしゃっていました。しかし、先生は教える側ですから、片田先生の授業を見て、「良いことを学んだ」だけでなく、あの授業を見た中で、授業実施者として、「こういうことが必要なんだな」ということとか、片田先生の授業から学んだことがあったら教えていただきたいです。

佐々木 あれから3年経ったのですが、片田先生の授業をそばで見させていただいて、同じことを次の子どもたちにもしてみようと思って、やってみました。しかし、片田先生と私との津波に対する思いであったり、熱意に多少の違いがあるので、うまく子どもたちには伝わらないところがあるなっていうのが自分自身の反省としてはあります。やはりリアリティというか、先ほど

から言われていますが、知識だけではなくて、思い、“絶対に逃げるんだ”って子どもたちに思わせるということがとても大事だなんていうふうに思います。

金井 その「思いが大事だな」と思っていられしやることを、授業などで、「子どもたちと接する中で具体的にこういうふうにやってみました」みたいなのがあったら教えてください。

佐々木 それこそ片田先生に教えていただいたときのものを真似しながらやっている状況ですけど、そこには「本当に私の心をちゃんといれないといけないな」ということと、もう一つは継続的にということか、「いつもそういうことを頭の中に入れて子どもたちに接しておく」ことも大事なんだろうなと思います。何かがあったから教えるではなくて、何も無いまにできることをやっぱりやっていきたいなと思います。

金井 玉置先生にもお聞きしたいのですが、シンサイミライ学校のあと、田辺第一小学校ではいろいろな実践がおこなわれていると思うのですが、「ここ注意している」とか「ここはうちの小学校売りですよ」というようなことはありますか。防災学習のメニューとして、『津波について知る』という授業をやっています、「防災マップづくりをやっています」という学校は多いと思います。避難訓練もそれぞれ工夫してやっていると思います。しかし、取り組み自体にユニークさを求める必要ないと思うんです。佐々木先生もおっしゃったように、そこに第一小学校の先生方に「どんな思いを込めているか」というのが何かあったら、先生の思いで結構ですので教えてください。

玉置 防災教育だけでなく、何気なく日頃から、そういう要素が入っているように思います。防災教育の時間だけをとるんじゃなくて、いろんな教育活動全体の中で、いろんな教科に散りばめられている。結局は、「防災教育を通して」というわけじゃなくて、“他者への思いやりの心”だとか、“命を尊重する態度”が、防災教育の場面で、地震や津波の場面で、子どもの心が本気で動かされた場合に、何か継続したものが芽生えていくのではないかと思います。その期待は大きいと思います。命とかそういう“他者への思い”、“家族の愛情”とか“地域への貢献”というものは、いろんなところで教育できると思うんです。ただ、片田先生の話をお伺いしていると、防災教育ってそのことをゴールに近づけるような要素が大きいと思うので、重要だと思っています。全職員そういう思いで、目当てとしては、“自分の命は自分で守る”、それから“命を尊重する”、“他者を思いやる”、“地域への誇りと愛情”、これらを第一の大きな指導の目標としてやっているわけなんですけど、1時間の授業の中の最初の段階で、子どもの思いを動かしてから、テクニックの部分やメカニズムにいかないただただ終わっていただけになると思う。そのため、いかに材料をそろえて、子どもを本気にさせていくか、を考えた授業づくりがこれから大きな第一の課題と思っています。そのためには、お互い見合っ、振り返ったり、検証していったりする場がなかったらなかなか難しいかと思います。日頃忙しい中で、他のこともいっぱいする中で、その時間をいかに見つけていくか。これも一つ大きな課題かなと思います。

金井 片田先生や我々が学校に出向いて授業しようとなったら、1時間一本勝負なんですよ。それまで一体子どもたちがどんな活動をしていたのかがわからない、そもそも性格もわからない、そういう中で、1時間をどううまく設計して防災上の効果を高めていこうか、と考えなければならぬ。しかし、学校の先生方でしたら、普段から子どもたちとの付き合いがあるので、一回の授業で全部片付けようとするのではなくて、いろいろな学習場面や学校活動を通じて、命

の大切さなどを継続して意識させることができる。そういう観点も現場の先生方には重要なと思います。ただ、そうはいても、「防災の学習をする中で一つの実践をしてみよう」となったときに、今日見ていただいたあの発問と子どもたちへの投げかけは、一つの案でしかありません。実際に、佐々木先生も真似てやっていただいたということですが、ああいう子どもの心を揺さぶって、主体性とい



西本 貴俊先生

うか、「逃げなきゃいけない」と強く思わせる授業案が何か他にないのではないのでしょうか。

それぞれの地域でも、おそらく同じような議論が少なからずあると思います。知識を教えるマニュアルは山ほどあるけれど、その先をいくものとして、授業をお互いに見合っ研究することも大事だというお話されました。同じように子どもの心を揺さぶるような授業を考えて、先月、実際に地域で研究授業をおこなった地域があります。次回の開催地域の黒潮町でそういう取り組みをさせていただきました。黒潮から新たに参加された先生もいらっしゃるので、研究授業をやった感想や、どんな授業をやったのかをご紹介いただきたいなと思います。西本先生、ぜひ一言いただければと思います。

西本 黒潮町佐賀中学校の西本といいます。およそ一か月前、南郷小学校で4年生と6年生で研究授業をやらしてもらいました。6年生では「津波てんでんこ」についての授業を行ってくれました。何度も何度も先生方全員が集まって指導案を検討していることもよく伝わってきましたし、そして、南郷小学校が一つになって取り組んでいました。この「津波てんでんこ」が、本当にてんで逃げるのが目的なのかなということ、本当に逃げるだけが目的なのかなということ、その授業の中で考えさせられました。やはり「津波てんでんこ」は、命てんでんこ、それぞれの命を守りあって地域の信頼のもとに、それぞれの信頼関係のもとに、その「てんでんこ」という言葉が生まれているんだ。そのためには、子どもたちに授業をしていく中で、地域というものをもう一度振り返らせてみるのが大切なのかなと思いました。しかし、地域と触れ合うために、いま、学校が考えなければいけないのは、私も含めて地域と疎遠になっている教員がたくさんいる。その中でどのようにして地域とつながっていくのか、そして、地域全体として、どのようなつながりを持ちながら、その震災に備えていくのか、地域全体の防災教育をどう進めていくのか、ということが大きな課題として学校にはつきつけられていると思います。その中で、子どもたちは、自分のことを一人ひとりが大事にする。そして、自分たちの置かれている立場を理解しながら、自分のできることを考えていく。さらに、自分自身の命を守ることを最優先しながら、子どもたちがその津波についての学習を進めていく。こういったことができればいい。それを小学1年生から中学3年生まで系統的に学習していくためのプランができることがいちばん望ましいなと考えさせられています。

先ほどの話を聞きながら一つ思いました。いま、本当に真剣に防災教育に向き合っているのは、子どもたちの方なのではないかと。教員はひょっとすると、「まだ来ないよ」「大丈夫だよ」という思いがあって、ひょっとすると子どもと教員の間、思いのズレというものが生じているのかなとも思います。自分の職場を考えたときでも、先生方は一生懸命やってくれているんですけど、子どもたちに伝わりにくい場面がある。あるいは、いろんな発想が出てきにくい

ところがあって、そのあたりが課題として強く思っているところです。素直に入っていく子どもはそれをリアルに受け止めるかもしれませんが、我々教員は、ひょっとするといつも現実を見ている。我々は、ひょっとすると 100 年後、何十年後の出来事と思いながら、教育を進めている場面もあるのかなっていうことを感じております。そのズレが解消されれば、自分を含めて、熱い思いになった授業が展開できるのかなと。今日の話聞きながらいろいろと考えさせられました。

片田 いまの西本先生のお話、本当にそうだなと思うんです。大人はやっぱりダメですよ。客観的に話をし、東日本大震災の事例を見せ、「ここも間もなくだと言われているんだよ」と言えば、子どもは純粹に迫りくる危険をストンとその感覚の中で考えてくれます。でも、教員も含めて我々大人は、いろいろリスク情報に慣れ過ぎている。「韓国で MARS が流行っている」だとか、「エボラ出血熱がでた」だとか、そういう情報を聞いても、“わがこと感”はゼロです。それこそよく引き合いにだしますけれど、交通事故で年間 4 千人も死んでいるけど、当事者感がないですよ。 「あれが危ない」、「食事にこんなものが混ざっていた」とか、いろいろなリスク情報を得ている中で、その中の一つに紛れ混んでしまっていて、「津波ね、危ないね」「津波が来たときには大変だ、対策しないと」となってしまう。リアリティが全然ないところにいる大人や教員と、しっかりと受け止めた子どもたちの間のコミュニケーションギャップが、僕も最大の課題だと実は思っています。

僕が釜石の防災教育に、僕なりに力を注ごうという僕の中でのリアリティを形成したのには、二つ理由があります。一つは 2004 年の 12 月 26 日にあったインド洋津波です。僕は昔、アメリカのワシントン大学にいたことがあって、その関係でアメリカの調査団で被災地インドに入ったんですね。初めて津波の被災現場を見ました。それも日本のように自衛隊が入って何かしてくれるというところではない国です。インド東海岸はアウトオブカーストと言われて、カースト制度にも入れてもらえないような極貧の地域で、そのままの状態の中、僕は現場に入りました。ご遺体はそのまま、瓦礫の中に蠅が玉のようになって飛んでいる、ものすごいにおいがしてくる、泣き叫ぶ家族がいる、という状況に身をおきました。あの衝撃はリアリティをつくりあげます。でも、それでもその程度の刺激ではダメです。お医者さんがご遺体を見るのに慣れているようにそんな現場ばかり見ていると、「ここもくさいな」なんて言いながら、そんなふうになっちゃうんですね。我ながら情けない話なんですけれど。見ることに慣れてしまう。でも、どうしても慣れなかったものがあつた。それは流木を集めて茶毘に付している現場で、そのわきに小さい子どもがさらに小さい弟を抱きかかえて、茶毘に付しているお母さんを見ている光景です。いまでもトラウマのようになっています。「あれがまもなく起こる」、そう思ったときに僕の中でのリアリティというよりも、「まもなくなんだよ」と。たぶんその辺がこの津波防災にあたって、いまだに僕の心の根底にあることなんだと思います。そして、いまはそのうえでさらに釜石の被災がある。これからまた次の津波がくる、ということを考えると、正直もうやりたくないんですね。でも、こうやって先生方と、事前のちゃんとした対応ができるようになれば、僕の見てきたものが少しでも軽減できる、同じことを起こさないようにできる。いま、西本先生の言われた「どれだけこちらがリアリティを持っているのか」という部分については、そういう面ではぜひ釜石の現場に行っていたら良かった。だから第 1 回は釜石だったわけですね。これはどれだけ映像を見てもダメだし、本を読んでもダメだし、その現場に立

つかない。子どもたちは話していく中で、知識として吸収していけるけれど、大人は本当にリアリティある経験によって、初めて子どもたちと対等に語れるところに行くのではないのかなというようにも思います。

インド洋津波を見てきた直後、まだ釜石が被災する前ですけど、子どもたちがしゃあしゃあと「僕は逃げない」「だって立派な堤防もできたし、お爺ちゃんも逃げない」と言う。大人たちのリアリティのなさに子どもたちが毒され、「逃げない」と言っている。そう考えたときに、「いま、僕らが現実感をもって、子どもたちの実効性のある教育にどれだけ展開するか、がそのまま被害の多寡を大きく左右する」という確信みたいなものを持っているんです。その最大の課題が、西本先生がおっしゃったリアリティのなさということなんです。東日本大震災を対岸の火事として、単なる時間の経過の中での忘却の対象としないためにも、改めてあの現場を思い出していただきたい。そして、明日ここで起こるかもしれないという現実感を常にもち続ける。それには教える側の律するところも必要だと思うんですね。僕はもう律する必要ない。インド洋津波のあの現場をいまだに思い起こしますし、それと釜石の光景なんか重なって、僕はもう忘れません。でも、そうはいっても我々はすぐに忘却していくものです。どうやってこの意識を保ちながら、子どもたちと向かい合えるのか。子どもといえど人と人ですから、ちゃんと伝わるという確信もあります。僕らが「きみたちの命を守りたいんだ」と思っているその思いは、教え方の上手い下手ではなく、「伝わるな」という実感があります。あまりテクニカルな話は重要でもないようにも思っているんですね。「何をどう教えるか」ではなくて、「子どもたちにどう伝えるか」を議論していく中で、「子どもたちをどうしたいと思っているのか」という教員自身が変わって行かなくちゃいけない。そちらの方が大事なんじゃないかなと思います。子どもと向かい合えば子どもは変わるんですから、少なくともこの間に共感のコミュニケーションがないといけなと思うんです。「先生はみんなの命を大事だと思っているんだ。」「ちゃんと逃げる子になって欲しいんだ」って。子どもたちは割と柔軟性があるから意識は変わるんですけども、教える側がそれについていけない状況をたくさん見受けます。「そう教えることが大事だと言われているから」、「片田の授業はそうだったから、自分もやってみよう」とやってみるんですけど、実はいちばんできていないのは教える側じゃないかと感じます。ですから、ある意味、こう言うと失礼なんですけれど、今日のこれも啓蒙活動だと思っています。防災教育の **How To** をみんなで議論するということが以上に、こういう議論を通じて「防災教育とはなんぞや」ということ、そしてそれ以前に「防災教育をする側はどうあらねばいけないのか」を学びとっていく場なのかなという思いがあります。

金井 佐々木先生の方からも、「同じような授業でやってみたけれど、なかなか伝わらない。やっぱり熱意の違いですかね。」との発言をいただきましたが、それに繋がるお話だったと思います。片田先生を前にして、そこまでの思いを誰も彼もがもてるかっていうとなかなか難しく、そこまでの経験なんてする機会も皆さんないですと。そうすると、いま、片田先生が最後におっしゃっていただいたように、一人で煮詰まらないで、議論を通じて熱を保つというか、思いを共有するために、このような集合や集まりをつくっていくことも続けていくために大事なのかなと思います。そのためには、玉置先生もおっしゃったように、一つの授業を題材に授業研究したりして皆さんで集まっていく。西本先生もご紹介いただいた南郷小学校は、非常に小さい学校だったので、校長先生はじめ全職員が「この授業をうまくやるぞ」という思いで、

かなり前から準備されていた。そういう議論を通じて授業者の先生も、学校全体でもうまく熱意をもった良い授業になっていたのかなと思います。

ここまでの議論を通じて、「うちではこんなことを思っています」とか「こういうこと悩んでいます」とかありましたらご紹介していただきたいと思います。牟岐町の栗林先生お願いします。



栗林 啓次先生

栗林 徳島県の牟岐町教育委員会の栗林です。退職して3

年目です。片田先生には平成23年12月23日に来ていただきました。釜石の子どもたちが津波から生き抜いたということで、それまでの防災教育の取り組みに感動しました。私も3.11のその日にとった行動について問い直す、見つめなおす機会になりました。釜石の防災教育から学ぶということで、周辺の小学校、中学校、高校、すべての学校の取り組みが変わっていきましました。いままでは“地域を学ぶ学校教育”だったんですが、“地域とつながる防災教育”をやっていました。子どもたちを通して、学校の姿を通して、地域の人、親も変えてみたいとなり、釜石の防災教育の手引きを配布したり、それを集まった先生方で検証しようとして提案しました。津波避難訓練の際には、「牟岐小学校が避難訓練を行います、学校から700m先の高台に子どもたちが全員避難するので地域の方々も一緒に避難しましょう」と声掛けをしたりしています。そうこうしているうちに、地域のいろんな防災の関係機関である婦人会、民生委員、警察、消防署など、いろんな団体が一緒に行動しようということになりました。大事なのは全教科にまたがる防災学習じゃないかと思います。そういうことを釜石から学びつつ、行動するときには大々的に、それを年間何回も何回も行いました。障害者の方が働いている施設からも「ぜひ私たちも参加させてもらえませんか」という申し出がありました。小学校の子どもたちは、「自分の命は自分で守る」ということが基本なんですが、心に障害のある方も一緒にやっているということで、寄り添ったり、保育園の子には、声をかけたり、手をつないだり一緒に行動しています。釜石の避難行動が、それぞれ頭にあります。地域とつながる防災教育を通じて、子どもが頑張る姿、行動する姿が親に伝わって、地域の人たちを協力するかたちへ変えていきました。

平成25年4月から小学校も保育園も高台の牟岐中学校の敷地内に移転しました。いまは、保小中一体となった防災教育カリキュラムを系統的にして、避難訓練等も保小中で行っています。避難三原則は、学校はもちろん、地域にも定着しています。小学校には一人でも逃げられる子に、中学校には助ける立場に地域のリーダーになれるようにしていきます。ずいぶんと子どもたちは成長して、内発的な気持ちも育ってきているかと思います。

金井 学校の防災の取り組みから地域とつながる防災教育ということでした。お話の中で、避難訓練を通じて、身体の不自由な人を助けたい、まさに行動を通じて「自分以外の誰かを助ける」というところに思いを馳せる。授業の中での問いかけだけでなく、そういう実際の行動を通じて、そういうところの気づきを与えていくということも、一つのやり方として重要なのかなということでお話し伺いました。

このパネルディスカッションは防災教育のためのコミュニケーション力ということですが、「コミュニケーション力を何と定義するのか」も難しいんですけど、最後に「先生方、一人

ひとりの資質として、どんなことが重要になるのか」ということを、皆さんと議論し、ある程度の共通理解をもって終わりにしたいと思います。

ここまでの議論の中で重要と思われることとして、非常に安っぽい言葉の言い方になってしまうのですが、“熱意”があげられるかと思います。片田先生からも先ほどお話いただきましたし、西本先生からも話題提供いただきました。小手先の授業を



中平 巖先生

「どううまくまわすか」という話ではなくて、そもそも「どうしたら子どもたちの心を変えていくことができるのか」、そのために先生方の資質として、「何が重要なのかな」ということは言葉で非常に言い表しづらいです。この辺について言っておきたいことや、「こんなことじゃないかな」というお考え、また「私はここをうまくやったんじゃないかな」というご経験があればご発言いただきたいなと思います。

中平 黒潮町立田ノ口小学校 6年の担任しております。また、防災担当をしております。授業の中で私たちが思っているのは、知識や体験があるうえで、子どもの心をどう揺さぶっていくかということを考えています。コミュニケーションというテーマになっていますが、「家族へ返していく」ことを授業で考えています。すべての授業で子どもたちは自己決定して、その結果を家庭に持ち帰って家族防災会議をもつことで、家族へすべてのことを返していくという活動をしていくようにしています。それから、どの先生でも授業できるように、今年は全学年で授業に案をつくり、校内研修もやることにしています。そんな中で片田先生に関わってもらって黒潮町でつくった「命でんでんこ」についての授業を自分もやりました。授業案では見知らぬおじいさんが逃げ遅れることを想定するのですが、僕はこれを家族に置き換えてやってみました。最初、おじいさんに置き換えたときは、「自分のおじいさんだったらどう？」って聞いたら、子どもは、「命もあと少しだし、ちょっと助けに行かなくても・・・」というようなことを言っていたのだけれど、「じゃあ、お父さん、お母さんだったらどう？」と聞いたら、「先生に責められているような気がして辛い」と言いました。その瞬間に、“わがこと”と捉えるように心は動いていったかなと思いました。だから知識の面では、ずっと継続してやっていかないといけないし、家庭は全部介して授業はやっていかないといけないのだけれど、心を揺さぶるところでは、教材とか画像っていうのは大きいなと思いました。

また、同じ授業を南郷小学校で黒潮町の多くの先生が集まって研究授業として実施した際には、教材について意見がでて、亡くなっている人を題材にするのはどうかというものができました。それが僕は心にグサッと刺さっていて、あとき授業をやったけれど、亡くなった人を教材として扱っていることについてはひっかかりました。ひょっとしたら、その家族の人は「これでいろんな命が助かるならいい」と言ってくれるかもしれないけれど、参加者の中でその言葉がでたことは若干心にひっかかっています。画像の有効性などを考えたらリアリティなものを使って共感を呼ぶことは非常に有効かなと考えています。

金井 「心揺さぶる発問」というキーワードもでていました、いまのお話は、黒潮でおこなった授業がどのような内容なのかについて、共通理解がないと難しいと思うので、私の方から補足します。この授業では、東日本大震災のときに釜石市役所から撮った映像を使っています。おそら

く皆さんもご覧になったことがあるかもしれません。市役所の目の前に津波がワァーッと押し寄せてきて、逃げ遅れたおじいさんが流されてしまう、という映像です。流される直前のギリギリのところ映像は編集されているのですが、授業では、津波がそのおじいちゃんに迫ってきているところで映像止めて、「きみがこのカメラを構えている人だったとしたら助けに行くかどうか」を問います。その人が「知らないおじいさんだったらどうか」「自分のおじいさんだったらどうか」「お父さんやお母さんだったらどうか」とだんだん身近な人が流された状況をイメージさせていきます。そして、最後には立場を逆に、「きみたちがあの状態になったときに、その様子を家族が見ている状態だったら助けに来て欲しいか」を考えさせます。先ほどの中平先生の場合だったら、自分のお爺ちゃんだったら「先が短いからいいかな」だけど、お父さんお母さんだったら「助けに行く」という心の葛藤を生み、結局何が正しいという答えはでないけれど、「いま出来ることはある」ことに気づき、「それを実行する」ことを促す授業です。



山本 健一先生

中平先生のご発言の中で、いくつか重要と思われる点があったかと思えます。「知識・体験をベースにしたうえで、それを踏まえたうえでやらないといけない」という話と、これは資質というよりも仕組みになるのかもしれないですけど、「授業で習ったことをなるべく家族に返していくようなやり口をしている」というのは重要なことだと思います。それからもう一つは先生方の資質になると思います。知識偏重になりがちな防災の授業の中で、如何にして「自分のことだよ」と考えさせる“心の揺さぶり”をいれるかと、“わがこと感”を高めるようなその仕組みをどう入れていくか、が重要ではないか、とご指摘いただいたのかなと思います。

山本

新宮市立王子ヶ浜小学校の山本です。平成27年6月28日に授業参観で防災の授業をしました。それまでの授業などで、「津波が来ました、どうしますか」と聞くと、子どもたちは必ず「高いところへ逃げる」と当たり前のように言うのはわかっていました。なので、“リアリティ”を持たせるということで、「家族が建物に挟まれてしまった場合、どうするか」という問いかけから、「究極の選択をしないためには、平時に何をすればいいか」というところへもっていく授業をやってみました。これは以前、片田先生が新宮市のワーキング会議でこのような授業が必要だという話をされていたものです。授業では、家族ではなくて、自分が挟まれてしまった場合を想定し、「家族が目の前で必死になって助けている」「でも津波警報が鳴っていて、もうそこまで津波がきている」「まわりはみんな逃げている」という状況で、「あなたは助けてもらうか、先に行ってと言うか」というところで考えもらいました。しかし、“知識の防災教育”が推し進められた結果の産物だと思うんですけど、全員「先に行って」って言うんです。それって、絶対に本心ではないと思って、どうにかして揺さぶりをかけようとしたんです。そして、「先生だったら絶対『助けて』って言う」と言ったころから、初めて「私も」「僕も」って子がでてきました。そこで、僕と子どもでどう思うではなくて、「この子はこういう意見を言っているけれど、こういう意見に対してあなたはどう思う？」というように、子どもからでてきた意見を他の子どもたちに振って、教室で共有していきました。すると、「あの子がこういうふう言うけど、それは違う」という子もいれば、「その子の意見を聞いて、やっぱり私も

『助けてもらいたい』って思うようになった。でも『助けて』って言ったら、目の前にいるお父さんお母さんが亡くなってしまう。」という子もいた。また、その意見を聞いた友達が「でも、お父さんお母さん助けてもらいたいけれど、僕の命も助けて欲しい」というように、いろいろな葛藤があったので、やって良かったかなと思いました。今年の12月に釜石に行かせてもらって、そこでのことを子どもたちに教えてあげたいという気持ちがすごく強かったので、授業の最後に写真も見せたんです。授業後、懇談会に残ってくれたお父さんお母さんたちが、子どもたちがボケーッと見ているのに対して『お前らこの写真がどれくらい価値があるのかわかっているのか』と後ろからすごく言いたかった、だけど授業中で邪魔するのは悪かったので、必ず家で『あの写真はこういうことなんだぞ』『そういうことを教えたいからあの先生は授業でこの写真を見せたんだ』と言ってやりたい」というようなことを言ってくれて良い授業参観だったなと思いました。

片田　いま話を伺いながら、少し私の思うところと、その境界の私の知識を少しお話ししたいと思います。尾鷲の中村先生が授業の中で、筆筒が倒れてきた事例をやっております。山本先生は自分が下敷きになったという状況想定から始めましたが、その授業では、二つの状況想定をだしています。「いまここで大きい地震があって、きみのお母さんが筆筒の下敷きになってしまった」「お母さんは津波が来るから行ってちょうだいと言っている」「そのときにきみはどうしますか」「逃げますか、それともお母さんの近くにいますか」と。最初に、その問いかけをするんですね。それはなぜかという、「自分が下敷きになる」ということには、リアリティがでてこない。それこそ“正常化の偏見”というのか、自分の命がそうやって亡くなるという状況想定を人間はなかなかしづらい。けれど、大事なもの、大事な人がそういう状況になったという状況は、すごくリアリティを感じられ、なおかつ、より深刻に事態を受け止めやすいんですね。「お母さんは『もういいから行って』と言う。でも、まもなく津波もくる。さあ、きみはどうする？」と言うと、その問いかけ直後は山本先生もおっしゃるように、まだ現実感もなく、「そんなのいやだ」と言いながら、始めは和気あいあい議論をしているんですけど、そのうちに現実感がでてくると、徐々に深刻な状況になっていくわけですね。ある子は「お母さんの近くにいる」と言います。「そんなんじゃ死んじやうじゃない」かと「津波てんでんこじゃないのか」というような話がでてきたりして、徐々にリアリティがでてくる。そして、二つ目の状況として、今度は「きみが下敷きになったら、きみはお母さんになんて言う？」「お母さんは一生懸命筆筒をどけようとしてくれるんだけど、筆筒は動かない。このままじゃお母さんも死んじやう。『もういいからお母さん行って』と言うか、『自分一人で死ぬのはいやだ、お母さんここにいて』と言うか」と。こうすると、やっとなんか“わがこと”として考える。防災の話をするときに、「きみの命が危ない」という話を直接もっていても、なかなかダメなんですね。一歩はずして、お母さんを・・・というかたちで入ると、割とその結果、自分のところにもってきやすいというところがあります。

もう一つは、「防災に正解がない」という点です。これまで先生方がおこなっている授業は、手元に教えないといけないこと、正解をもっています。そしてどこに導かなきゃいけないのかっていう明確な目標があって、そこに向かって淡々と教えていきます。その教え方の技術を研究授業なんかで議論するわけですね。ところが防災の授業には、「正解がない」と思うんです。子どもたちに議論させたときに「筆筒の下敷きになったお母さんをおいて、僕は逃げる」、

「そんな薄情なことにはできないから、僕はお母さんの近くにいる」と言った子に対して、どちらが正解とも言えませんよね。「お母さんの近くにいる」と言った子には心優しい良い子だと言ってやりたいし、「お母さんが『逃げろ』と言うから僕も逃げた」と言った子は命でんでんこちゃんとできる子だとやっぱり褒めてあげたいし、そこには正解も何もないんですね。そのときに、そこで子どもたちに言わないといけないのは、「先生もわからない」「どちらが正しいのかわからない」「大事なことはこんな嫌なことを考えなくて良くなることだ」「つまり筆筒の下敷きにならないこと」と。その授業は家具の固定が大事であるという授業だったんです。これまでの従来の授業であれば、「家具の固定大事だよね」「だって阪神淡路大震災ではこんなに家具の下敷きになって人が死んだもん」「だから家具の固定大事だよね」だったでしょう。そうではなくて、下敷きになったお母さんの状況、そしてそれに対してきみはどう振る舞うか、今度はきみが下敷きになった、お母さんになって言う？という現実感を植え付ける。ここでキーワードになっているのは、先ほども言っていただきましたが、“家族に返す”ってことなんです。おそらく人にとって、人間誰しもそうなんですけれど、何が大事かって、それは親であれば子どもであったり、子どもとすればお母さんであったり、夫婦であったり、恋人であったり、いろいろ大事な人っていうのがあって、本当に何もかも破壊し尽くす災害ということを議論するとき、最後一番大事なのは家族なんだろうと思うんですね。この家族の間の愛情だとかという問題はあえて意識しない、デフォルト値として当たり前になっている、再認識しない。左海さんの話を伺っていても、友稀ちゃんは当たり前のように「お父さんが迎えに来てくれる」と思っているし、お父さんは当たり前のように「迎えに行く」と思っている。そこに友稀ちゃんは父親の愛情なんか感じていなかったと思います。その環境の中で生まれているから、それがあって当然の当たり前のものになっている。でも、それができない津波の状況を想定する中で、「家族って大事だな」と“家族の絆”というものを再認識した。そのうえで、「お父さんは自分の命よりもきみの命の方が大事なんだぞ」とあらためて言って聞かせると、「だから自分の命を守ることはお父さんの命を守ることだ、お母さんの命を守ることだ」ということに気づきがある。そこで“家族に返す”ことが意味を持つてくる。自分のことよりも、家族のことで議論することによって客観性がでてくるというのか、正常性バイアスという自分のことを横においてしまう問題を回避できるということがあると思うんです。

先生方も教えるということに関しては、正解をもっていて、正解を教えようとするが無理がでてくる。正解なんかないんですね。一緒に悩む。「先生もよくわからない」というところまでさらけ出したときに、「こんな問題を考えなくていいように、事前の対応をちゃんとしておこう」と初めて気づく。あらためて家族の関係というものを考え、「お母さんの行動はこうだ」「お父さんの行動はこうだ」と考えたときに、初めて“命でんでんこ”の意味が本当に理解できる。先生が子どもたちに迫られたアプローチの仕方も、家族との関わりというものがあつたから教育効果があがつたんだと思います。

あらためて防災をやり始めて思うのは、防災は、「津波に対してどう向かい合うのか」「災害に対してどう向かい合うか」の前に、家族との関わりを再認識することが必要なんだと。その日そのときに自分がとる行動は“正常化の偏見”が働いたりして動けないところ、だけど最大の行動規定要因が家族との関わりだったりすることを再認識する必要があると思います。そう

いう部分から防災教育を進めていくと、あらためて“人間教育”や“絆の教育”へどんどん広がっていく教育なんだなというのを感じます。

金井 いくつかキーワードでできたように思います。『心揺さぶるような問いかけ』、それから『家族や自分の大切な人のことを考えさせる』、家族に返すという言い方をさせていただきました。それから、何よりも先生方の熱意を高める。一人ひとりじゃ難しいかもしれないけれど、集団として、熱意を高めていくことに対して、努力は怠っちゃいけないなという感じがしました。最後、山本先生にご紹介いただきました、釜石に行っていたときの写真を紹介したお話は、子どもにまでは伝わらなかったけれど、親御さんには先生の思いが確実に伝わっていた結果なんじゃないかなと思います。

どうしても一つ聞きたかったことがあるんです。最初、左海さんに片田先生が「友稀ちゃん、絶対逃げますよね」と聞かれたら、二つ返事で「うん」と言わないで、ちょっと苦笑いしながら頷いているのが非常に気になりました。シンサイミライ学校の授業を受けて2~3年近く経ちましたが、継続という観点でぜひいまの左海家の様子をお聞きしたいです。ちゃんと備え続いていますか？

左海 先ほど申し上げましたけれど、当時小学校1年生の娘がおりまして、シンサイミライ学校の機会いただいて、本当に心配だったのはその娘のことだったんです。もちろん小学校1年生ですから、道もあまりわからないし、言っていること自体、理解しているかどうかともわかりません。そのため、一番下の娘には、シンサイミライ学校のあと、車でいろんなところに送り迎えしたりする中で、「家族で集まるのはオーシティーだ」と、近くをよく通るので、通るたびに「ここへ集まるんだ」と言ってきました。また習い事であったり、いろんなところへ遊びに出掛けたときも、「とにかく高台だったら動かない」「ここだったらあっちに逃げないとダメだ」と、常に意識して下の娘にはそういうことを言ってきました。その娘がいまはビデオの友稀と同じ4年生になっていまして、また佐々木先生に担任していただいています。当時から学校ではやっていただいているので、そこはまったく心配していませんが、やはり先ほど中平先生がおっしゃっていたように、もっと家庭にどんどん話を振っていただいてもいいのかなと思います。先生がこれだけいろんな工夫して、苦勞されて子どもたちに教えようとしているのだから、親が一番、愛する者に対して伝えないといけないと思うので、学校はそのことをどんどん家庭に振っていただいてもいいのかなと保護者としては思います。本当に先生方、ご苦勞で頭が下がる思いです。左海家といたしましても、子どもはどんどん大きくなっていくので、少し大丈夫かなという気持ちもありながら、この場で先生方のいろいろなお話を聞いて、ちょっともう一度引き締めなおさないといけないなと再認識いたしました。

金井 総じて言うならば、効果はちゃんと継続しているということがよくわかったかと思います。

以上